

【 翻 訳 】

王独清著，池澤實芳訳『私のヨーロッパ滞在記』(1)

池 澤 實 芳

訳者まえがき

王独清(1898.10~1940.8)は、陝西・「長安」出身の詩人である。王独清の自伝小説『長安城中の少年』(1933年10月、光明書局)の記述によれば、「1898年の陰暦8月16日」の生れとあり、また、「われわれの本家すじの家族は蒲城フチョンにいて、長安にいるのはわずかに父の一家だけ」(田中謙二訳『長安城中の少年』1965年12月、東洋文庫)という。陰暦8月16日は、陽暦10月1日で、「長安」生れとするのは、正しくは西安生れである。長安は、明(1368~1661)の洪武2年(1369)に西安と改称されている(李建中「王独清生平考辯」(『新文学史料』1994年第3期))。周永珍『留法紀事：二十世紀初中国留法史料輯録』(国家図書館出版社、2008年7月)所収の「留法勤工儉学生姓名、批次表」によれば、同船者の「勤工」の譚慶蘭の「籍貫」が「陝西富平」と記されているのと同じく、なぜか欧州渡航の際の王独清の「籍貫」を「陝西富平」と記録しているけれど、西安城内に生れた王独清の原籍は、陝西省蒲城県である。しかし、創造社同人の郭沫若が『創造十年続編』(1938年1月、北新書局)で、彼のことを「長安人」と紹介しているのと、王独清自身が『長安城中の少年』と自称しているのなどで、一般に、王独清の出身は、長安ということになっている。その故に、彼は故郷・長安所縁の貂蟬や楊貴妃の物語を戯曲にした。

王独清の文学活動は、1925年5月の5・30事件を境にして、前期と後期に分けられる。欧州滞在時期と重なる前期は、自我、個性をテーマにした浪漫主義、象徴主義の文学をめざし、欧州からの帰国後の後期は、革命文学を志向した。中国現代文学史からみれば、創造社のメンバーの一人として、主に20年代に活躍した詩人と位置づけられる。つまり、文学史上では、前期の作品が重視され、後期は軽視ないし無視されている。王独清は、30年代に至り、欧州留学時期の友人との交際を通じて、トロツキズムに接近し、トロツキストになった。資料は少ないが、当時の友人の証言によれば、抗日戦争勃発後は、抗日の姿勢を貫いた、とわかる。しかし、そのスタンドプレイやら、トロツキストへの接近やら、人格、思想上から王独清は、他の多くの創造社メンバーから嫌われた。そういう王独清への嫌悪は、その後の彼への文学評価の低さにも影響を与えているように思われる。しかし、1991年12月のソ連崩壊を契機に、スターリンらソ連当局が秘匿していたコミンテルンやトロツキーに関する文書が公開され、コミンテルンやトロツキズムへの再評価が行われはじめた。中国でも、その影響を受け、トロツキスト・陳独秀に対する名誉回復、再評価が行われた。トロツキストだった晩年の王独清に対する再評価がなされるべき時が来ているのではないか、と思われる。

彼の作品には次のようなものがある。詩集：1926.12『聖母像前』、27.8『死前』、28.8『威尼市』、29.2

『埃及人』, 28.11『11. DEC.』, 32.6『煅煉』, 33.8『零乱章』。／戯曲: 27.9『楊貴妃之死』, 29.10『貂蟬』。／自伝小説: 32.7『我在欧洲的生活』, 33.10『長安城中の少年』(光明書局)。／その他に翻訳, 雑文, 短篇小説, 選集がある。私見によれば, 王独清の生前で最初の著作は, 26.12『聖母像前』(光華書局)で, 最後は, 雑文集の36.4『如此』(新鐘書局)と36.4『王独清選集』(万象書屋)である。

日本では, 王独清は, 「作者の十七・八歳に至る生いたちを回想した」という田中謙二訳『長安城中の少年』(平凡社)の作家, つまり自伝作家として知られる。先行して書かれはしたが, 内容的には『長安城中の少年』の続編に位置付けられるこの自伝小説『私のヨーロッパ滞在記』は, 次の2点で重要である。1つは, 王独清の前期, 後期の文学活動を読み解く上で, ヒントになる鍵であるからである。王独清は, 当該テキストの「自序」にあるように, 実際活動をめざしていたようである。つまり, 詩人ではなく, 革命家になることを志向したのである。裏を返せば, 王独清が30年代後半から40年8月に病死するまでの晩年に詩作を放棄した理由が説き明かされているとわかる。たとえば, この作品の第10章の末尾に, 欧州を出発し, 帰国の途につく王独清の述懐が, 次のように綴られている。すなわち, 「ついに, その時が来た。私はすべての放浪を, 頹廃を, 青春の狂喜と苦悩を, すべてのすべてを, 全部ヨーロッパに置いていこう。私の新たな命を迎えるために出発しよう。些かの感傷はある。だが, それは, 未練によるものではない。それは, 数年来の時間を, 自分が無為に過ごしてきたことによるものだ。」と。そして, 「だが, 私はすぐにこう考えた。「私の前方には革命が待っているし, 歴史の偉大な革命が待っているのだ……」」と。5・30事件に触発され, 発奮し, 帰国しようとしたが, 旅費が工面できなかった。が, 半年後, ようやく彼は念願の帰国の船に乗ることができた。王独清は, 帰国後, 一方で, ヨーロッパでの果実である詩集『聖母像前』を収穫することから始めるが, もう一方では, 新しい革命の詩を作りだす。しかし, やがて, 詩作を捨て, 革命という実際活動に従事する。もう1つの重要な点は, 作品そのものとしても, 赤裸々な王独清自らの青春の放蕩, 流浪の軌跡とその内面の剔出を行っている点ですぐれているからである。とはいえ, たとえば, 王独清が革命家をめざそうとした原体験ともいべき記述として, 忘れがたい場面が, 遠慮がちにさり気なく, 印象的に描写されている。すなわち, 第3章末尾近く, 1921年9月のリヨン中法大学での, 勤工儉学生たちによる闘争が失敗した直後にリヨン中法大学を訪ねた様子と, その後, リヨンからモンタルジに一人列車で帰る時に, 王独清に生じた民国政府への不信と階級意識の芽生えの場面である。この自伝小説は, 革命家になる決意をした者が, 革命家以前の自らの青春時代の放蕩と頹廃と無為を抉り出した作品である。その抉り出し方が, 実に面白い。『長安城中の少年』の訳者・田中謙二が, その後書き「訳者のことば」で, 1933, 34年頃に, 中国で自伝小説がブームになっていたことを指摘しているけれど, 30年代の多くの自伝小説の中でも, この作品は, 破天荒な主人公の異国体験の告白として, 異彩を放っている。

1920年5月9日に上海からアルマン・ベイ号に乗船した王独清の欧州滞在時期は, 1920年6月15日, マルセイユ着～25年12月29日, マルセイユ発までの, 作者21歳から27歳までの約5年半である。中国の現代史の中では, 1919年5月の五・四運動の直後から五・三〇事件(25年5月30日)の起こった年末までで, つまり, 五・四運動と26.7北伐開始との間の時期である。この自伝の構成は, 前書きの「自序」と本文の第1章～第10章, 及び後書きの「附記」から成る。本文の前半(第1章～第5章)は, 主に蕪雲との恋愛, 後半(第6章～第10章)はその後の欧州遍歴について描か

れている。

本稿のテキストは、新世紀万有文庫・近世文化書系『我在欧洲的生活』（遼寧教育出版社，1998年12月）である。なお、初版（未見）は、李建中「王独清生平考辯」（『新文学史料』1994年第3期所収）によれば、「1932年，光華書局出版」とし、「1934年，被禁」とのこと。初版の2年後に発禁にはなったが、その2年後の36年6月に大光書局から再版されている。訳出に当たって、大光書局の再版本を参照した。なお、訳注で参照した辞書類は、『民国人物大辞典』（1991年5月，河北人物大辞典），『中国近現代人名大辞典』（1989年4月，中国国際広播出版社）などであるが、煩瑣を避けるために、一々典拠や該当箇所を明記していないことをお断りしておく。

自 序

私の過去の生活の一部を叙述したものでしかない本書も、友人の激励や出版社の催促がなかったら、おそらくは今でも完成の望みはなかったのではないだろうか。私は自分の過去を書きたくはなかった。とくにヨーロッパでのことについてはそうである。なぜなら、私のこれまでの人生の中でも実際の闘争からかけ離れていた時期と思われるからである。

当初の計画は、私の少年時代から現在までの全部を叙述する自伝をめざしていた。しかし思いがけず、去年私に執筆依頼をしたその出版社が急に予想外な出来事に出遭ってしまった。また私のほうでも不安定な暮らしを送ってきたため、原稿の大半を失くしてしまった。本書は、去年残された原稿を補充して出来あがったものにすぎない。私は私の生活を誇張しようなどと考えたことはなかったが、しかし私自身のことを叙述する必要性があるとすると、むしろ私はヨーロッパに行く前とヨーロッパからの帰国後を選ぶだろう。とくにここ数年来の私に対する各方面からの攻撃と、かつての友人たちが連合戦線を組んで行なった誹謗痛罵とを書かなくてはなるまい。——これこそ、私は真正な意味のある生活だと思っている。この攻撃と誹謗痛罵に関して、私は将来いつか書ける機会があるだろうことを願う。そうなれば、本書よりも何倍も面白いものになるだろう。

だが、私はどの時期の生活もそれぞれに複雑にして幾重もの波濤があることを否定しない。私が不満に思っているこのヨーロッパの時期においても、私の回憶を十分に膨らますことができる。本書の中で、私はできる限り、私個人の身体を濾過した雫を解き放ち、私の背後にある時代の洪水に触れさせている。もしも私が詳細に私を叙述することが免れなかったとするなら、それは私の身体全体が極めて嚴重に時代の網の中に絡みとられてしまったからである。しかし、必ず声明しておかなくてはならないのは、私が完全にそのように成し遂げることができたとは言えないということである。なぜなら私の目の前の環境が私に与えてくれた時間では、私の工作をよりよいものとするための推敲の可能性を失わせたからである。

本書の執筆中に、私は毎月平均して2ヵ所も引越しをくりかえした。同時に、飢えが私を圧迫した。本書の材料となる私のすべての書籍は、紛失してしまい、飢えを解決するために、名残惜しくも書籍商に売り払ってしまいました。そんなわけで、書きあげてから私はもはや詳細に本書を読み直すことはなかった。おそらく私自身でさえも失望するような内容であるかもしれない。だが、たとえ拙劣なMosaicの図案であっても、時に読者は作者の表現する一貫した意義を見いだすことができ

よう。このことが、たぶん私が、敢て本書を公開する一つの理由であると言えよう。

ここで少し社会上の実際問題に触れておきたい。私が永遠に実際問題に接触していくことや、あるいは将来さらに激しく接触することになるだろうというのは、仕方のないことかもしれない。これは、私が攻撃と痛罵を受ける原因である。本書の出版は、あるいはまた私を攻撃したり痛罵したりすることを待ち構えているそれらの人たを忙しくさせるだろうか。しかし、私はかつてそんなことを顧慮したことはなかった。私の運命はあるいは人から虐待される場面の中で死んでいくように運命づけられているのかもしれない。

この中のすべての出来事はみな実在のものである。ただし、一部の人名以外は、私は別の形式で表現した。これは誰かが「索^{インデックス}隠」を作るためにそうしたのではない。これは目前の状況下で出版するための方便であるにすぎない。

これでもう言うべきことは何もなくなった。現在は 1931 年 12 月で、私の年齢は 33 歳である。生活は実に苦しいが、しかし厳粛である。中国はまさに日本帝国主義による満州侵略を受けており、全国の青年は被圧迫の中で絶叫し奔走している。私のこの本はまさに「五卅」事件のところで筆を置いた。ところが私の目の前では、また「五卅」時代の真実の光景が現われている。—— そうだ。これはまだ「五卅」に至らない前夜ではあるが、しかし、空气中を何かが移動している。私は私の困苦の生涯の中で、断固として、死を耐え忍びながら、私の時代の到来を待つことにしよう!?

—

私がヨーロッパの土を踏んだのは、1920 年の春¹ だった。

初めてパリを訪れた時のことを覚えているが、私はほとんど眼が眩んでしまいそうだった。初めてセーヌ河畔を歩いた時など、私の心は言い知れぬ快感で満ちあふれていた。——言うまでもないが、文化の遅れた東方に長く暮らしていた青年が、資本主義の文化の発達した中心にやってきたとたんに、彼の愉快はどうしても止められなくなってしまったのだ。

たぶん愉快が度を越したためだろう。私はパリに着いたその日に、あちこち見たいがために、一人で一台のタクシーを頼んだ。そのタクシーの運転手に街中至る所を運転させたため、何たることか、私と同じ船に乗ってフランスまで来た仲間から、その朝ようやく借りた 200 フランの金を全部使い果たしてしまった。200 フランといえば、当時の留学生にとっては実に大金だった。フランスに着いたとたんに、一枚の銅貨もない私は、友人からようやく借りた大金をわずか半日のタクシー代に使ってしまった。私という人間の計画性のなさ、浪漫的な性格ときたら、この一件だけでも理解できるだろう。覚えているが、私はその日の夜は食事をとらなかった。なぜなら私は街を駆けずり回った後に、ポケットに一枚の銅貨も残っていなかったからだ。

しかし度を越したこの愉快は、結局長続きしなかった。私の生活は苦悶の中に落ち込んでいった。私は本来パリに常住しようと思っていたのだが、予想外にも一週間住んだだけで、フランスの首都から外れたある地方都市に放逐される運命となった。

この件は話せば長くなる。私は上海を離れる時に、ヨーロッパでの私の暮らしに関して心積もりがあった。当時、中国は五四運動の後で、上海や北京の大都市で実に多くの新文化団体² が作られた。

その中で最も大きな規模で最も組織的だったものに、少年中国と呼ばれる学会³があった。——この学会は、今でも覚えている人がいるだろうと、私は思う。当時、その機関雑誌は自分の思想を發表したいと考える一般知識青年にとってほとんど唯一の刊行物だったと言えよう。その会員は大学教授、学生及び新しい思想を持っている新聞記者だった。しかも該会は組織を海外にまで拡大していて、ドイツ、フランス、アメリカの留学生の間でも分会を設立していた。私はこの学会の会員ではなかったが、しかし私が上海で交際していた人たちはみなこの学会の関係者だった。当時、中国の各大型新聞のヨーロッパ特約通信の中にパリ通信社の通信があったが、そこを少年中国学会パリ駐在の会員が主宰していた。私が上海でヨーロッパに赴く準備をしていた時に、私と交際していたこれらの少年中国学会の会員が、何度も私にもしも私がパリに行ったらパリ通信社の工作に参加してもいいと説明した。私は当時、パリに着いたら必ずその通信社に参加することを決めていたわけではなかったけれど、しかし、私はこの学会とのこれまでの長い友情により、パリ到着後にその通信社を手助けしてもいいと思った。言うまでもなく、私の当時のこのような観察はあまりに単純すぎたし、ほとんど社会上の生活を理解していなかった。しかし同時に私のヨーロッパに行きたいという気持ちが切迫していたために、その後の生活の詳細な計画については顧慮する時間がなかった。これは私にとって、留學生活に対する当てにならない心積もりを抱いてのヨーロッパ行だったと言えよう。

とはいえ、留學生活に対する当てにならないこの心積もりも、もしもそれを妨害する別の原因がなかったならば、あるいは現実となる可能性があったかもしれない。しかし図らずも一つの予想外な出来事のために、私は当時の少年中国学会の数人の中堅分子と絶交するはめに陥った。それがつまり、私と吳翦雲 [吳若膺を指す] 女史との恋愛事件だった。

吳翦雲女史は、四川人である。彼女の父[吳虞]⁴は、四川で“名士”の声望があった。彼女の妹は、四川で大官僚の職位に任じたことがあり、また上海のある大学で教務長を務めたことがあり、そして最後には暗殺された政客・潘某⁵の夫人である。彼女は上海にいた時、友人の紹介で、私と同船してヨーロッパに赴くことになった。当時、私と同船した者は多く、女性は彼女を含めて3名いた。その他の2人の女性も四川人で、一人[胡蜀英]はまだ若く、もう一人[王耀群]は少年中国学会のパリの中堅分子・周虚成 [周太玄]⁶の許嫁だった。男性は全部で10数人いた。その中にはその後、進歩的政党の革命人物になった者が数人いた。8年後、恐怖の政変の中で犠牲になった趙斯年[趙世炎]⁷、熊尊韻[熊銳]⁸は、どちらもその船中の洋行者だった。言うまでもなく、当時、私の年齢は青春時代の真っ只中にあり、その長旅の航海暮らしの中で、毎日、彼女といっしょに親しく語りあううちに、次第に互いに気心が知れてきて、彼女は私に対して、どうやら当初から、一種特別な計画を持ち始め、船上のその他の仲間に対する態度とは違って私に接するようになった。たとえば、趙斯年、熊尊韻も、毎日、彼女と親しく語りあっていたが、どちらも彼女の気を引くことはできなかった。——これは、たぶん私の考えでは、私のプチブル階級の気分がかなり発揮されたために、簡単に彼女と気があったのだと思われる。しかし、この「簡単に彼女と気があった」ことが、まさに、その後、私が墮落する原因になったのである。

翦雲は背は高くなかった。彼女の容貌は美人というほどのものではなかった。しかし、彼女は表情が豊かで、生まれつき活発な態度は男を魅了した。彼女は話も上手かった —— これは四川人の特

徴である——何かの問題に出合っても、それなりに対応することができた。当時の中国では、彼女のように知識の高い男性と平気で付き合うことができたり、常に多くの問題を提出し互いに弁論することができる都市の女性は、確かに少なかった。だから彼女が上海にいた時、しばしば文化運動をしていた青年たちに包囲されていた。とくに少年中国学会の会員は、その大部分がみな彼女のご機嫌を取っていた。実を言えば、私は彼女に対して完全に満足していたわけではなかった。私は彼女の言葉と挙動の中に、いつも少なからざるわざとらしい虚栄と虚偽が現れていると感じていたからだ。しかし男女間の関係は真に断言しがたい。私は彼女に満足していなかったけれど、しかし、彼女に屈服していた。これはもちろん私の当時の自信のなさからくるものだったが、同時に彼女が私に対して示した自発的な力が強すぎたことによるものでもある。彼女は完全に積極的に私を挑発し、私に進攻した。初めてのキスさえ彼女のほうから要求したのだ。しかしこういう状況のなかでも、彼女は私に対して、彼女自身の過去の生活を直隠しに隠そうとした。彼女に、ヨーロッパで待っているもう一人の恋人がいることを、私は少しも知らなかった。そしてその恋人とは、私が上海にいた時に会ったことがある少年中国学会の中心人物の一人だったのだ。それは、当時、かなりの名声を博していた汪廣季 [王光祈]⁹ だった。

私がパリに着いた3日目に、この恋愛の難事件は勃発した。汪廣季は翦雲がパリに着いたと知るや、すぐにベルリンから夜汽車でやってきて、彼女を出迎え、彼女と同宿した。この事実が露見し、私はすべてを悟った。私はこの複雑な関係を放棄しようと決心した。しかも彼女にその日のうちに彼とベルリンに行くように勧めた。実を言えば、翦雲の態度は非常にあやふやで、彼女が私と仲良くなったのは、たぶん当初は三角関係を維持したかったからではないだろうか。彼女は廣季と年齢がかなり離れており、彼との関係を半ば秘密にしていた。彼との仲を秘密にしたい理由は、ヨーロッパでの彼女の生活費のうち、家からの仕送りでは不足する分を、彼に援助してもらう魂胆だったからだ。つまり、彼女と彼との結合は、別種の成分が混ざっていて、彼女の性愛の要求は、別の所から満足させなくてはならなかったことは明白なことだった。そして私は彼女のその要求を供給する人間になったということだったのだ。しかし彼女は結局年齢が若かったので、この計画の実行に対して、経験不足のために周到さに欠けてしまった。となれば私は、もはや彼女と交際を続けることはできないと彼女に告げた。すでに廣季が彼女の不実に気づき、激怒して彼女を棄てて、一人ベルリンに帰ってしまったという状況の下ではあったけれどもだ。

この変化は一日の間に起きた。私にとっては、生涯で最初に出くわした男女間の複雑な事態だった。これは翦雲にとっても当然、打撃となった。彼女はもともと廣季と折れ合うつもりだった。ところが、意に反して廣季が断固たる態度に出て、ついに修復不能となった。廣季は結局世故に長けた男で、これまでずっと実務によって名を揚げてきた。皺が多く頬のこけた彼の顔と髪の毛の抜けた頭頂を一目見ただけで、これまでに多くの修羅場を潜ってきたことがわかる。言うまでもなく、彼はこの事態をてきぱきと処理できた。彼は翦雲の考えを見抜いた。たとえ暫時妥協しても、将来必ず裏切られるに違いない、このままずるずる関係を続けていて、さらに面倒を大きくしてしまうよりは、むしろ早めに手を引いたほうがいい、と考えたのだ。彼が去ってから、翦雲はまるで大病に罹ったかのように、ベッドに横になりいつまでも大泣きした。しかも彼女をさらに辛くさせたのは、彼女と同船した2名の女性が、彼女と同じホテルに泊まっていたことだった。この時2人とも、突

然口実を設けて引っ越して行ってしまった。その原因ははっきりしていた。その2名の女性のうちの1名は周虚成の許嫁だったからだ。少年中国学会内部の関係を保つために、すでに周虚成の友人・汪廣季と決裂した呉翦雲と仲良くなっていることはできない。もう1名の女性は年齢はまだ若かったが、しかしまさに周虚成の許嫁の力を借りて、周虚成の若い友人である若者を紹介してもらい、その彼をボーイフレンドにすることができた。だからやはり彼女に従ってその住まいを離れなくてはならなかった。次に、翦雲がパリに着いたばかりなのに、早くもこのような不道德な行為を引き起こしてしまった。これはその2名の女性からみれば、たしかに不名誉なことだった。考えたらわかるだろうが、誰が不名誉な者といっしょに暮らしたいだろうか。彼女たち自身の名誉を保持するためには、やはりすばやく引っ越してしまうほうがいいわけである。——この種々の状況は当然一つの結果を促した。つまり責任が私の身に及んだということだ。そして、現実が、彼女に対する私の態度を変更させてしまうことになった。

たぶん私という弱い人間の態度だったのだと思う。私は一つの事態に出遭うたびに、自分ではとっくに処理の方法を決めていることでも、その後になって、その他の原因により、自分が決めていた決定を翻さざるをえなくなってしまう。私の多くの計画はいつでも私のこの弱点のために失敗に帰してしまう。今回、仮に私が、翦雲の性格を知った時にとる態度を堅持したとしたら、彼女と彼女の元々の恋人とが別れたことなど心配せずに、私が依然として動じなかったなら、それ以後の種々の悲劇は発生するはずもなかったし、私という人間は決して墮落するはずもなかった。これはつまり、もしもそうだったとしたら、私はもはや彼女の力に屈服することもなかったろうし、とすれば私は決して一日一日と苦痛の中に落ちこむこともなかったし、その後も決して頹廢の中でその日暮らしをすることもなかった。しかし現実が、彼女に対する私の態度を変更させてしまった。これは真に私の不幸だった！ どうか会いに来てほしいという彼女からの簡単なメモを受け取った時に、私は彼女に対してすでに決めていた態度をすっかり忘れてしまったかのようだった。ベッドに横たわり大泣きしていた彼女の姿を見た私は、より一層彼女の世話をしなくてはならないという思いにかられてしまった——しかし、私はここで告白してしまうが、その時の私の彼女に対する熱い心は、完全に一種の憐憫の情から出ていたものだったのだ。それまでの彼女の行為を見ていた私は、すでに彼女を嫌悪していた。この時、私の態度の変更を可能にしたのは、まさに彼女が棄てられてしまい、しかも孤独の苦しみに落ちこんでいるという一点によるものだった。私の当時の幼稚な頭は、一種の理想を抱いていた。つまりたとえ私が完全に友誼のために彼女の世話をしたとしても、彼女と男女の関係を生じさせたりはしないし、同船した時のあの性愛の初歩のキスでさえ再演を拒絶しなくてはならないという理想だ——ちょっと考えただけでも！ これは何と可笑しい理想だろう！一番可笑しいのは、私が当時このように決意した時に、自分では非常に自信があったことだ。どんな状況下でもやり遂げられると思った。言葉にすれば慙愧に堪えないが、その決意も3日目の夜には、すでに自分を失ってしまったかのような状態の下で、私はこの理想を壊してしまった。しかも事実の襲来は、飛躍の情勢となった。かくして30分以内に、彼女は私の実際の情婦になってしまった。

その夜の情景を、私はいまでも明瞭に覚えている。——正直に言えば、彼が墮落し始めた事実を誰が忘れようか。これまで性愛方面に対して慎重な態度をとっていた青年が、好きでもない人から

純潔を奪われてしまい、そのためその後元気がなくなってしまったとしたら、そういう生活の変化の発端を、どうして忘れ去ることができようか——その夜、私はもともと彼女のために荷物を整理してやっていた。というのは彼女はパリを離れ、M市[パリの南約100キロのモンタルジを指す]の学校に進学したいと彼女が言ったからだ。彼女を送り出したら、私の責任は一段落すると考えた。私は電灯の下で散らかっていた服と書籍を彼女が中国から持ってきた馬鹿でかい木箱の中に詰めるのを手伝った。一つ一つ全部きちんと整理し終えると、明日出発するのかと彼女に聞いた。私がベルを押しホテルのボーイに精算させようと思った時に、急に彼女はベッドに倒れ、頭が痛いといい、ぐいっと私を引っ張り、“ヒステリック”に泣きだした。その時、部屋の中はとても静かだった。まるで——少し神秘的な言葉をお許しただけならば——何らかの力が私を圧迫していたかのようだった。彼女の手がだんだん私の首に移動してきて、思い切り私を彼女の胸の中に抱き寄せた。部屋の中の電灯はすばやく私の目の前で光を失った。私は無抵抗のうちに、私の身体を彼女の身体にくっつけて……

30分後、私は後悔で頭を垂れていた。私の耳元にくっつけていろいろな質問をする彼女に、実にあっさりと言こう答えたのだ。

「いいよ。きみといっしょにM市に行くよ。」

こうして、3日目に私はパリを離れた。

二

パリにいた一週間のうち、私は全く友人と往来しなかったというわけではない。席帯均^{せきたいきん}は私がパリに着くやすぐに頼った人間である。彼は私よりも数ヵ月ほど早くフランスに到着していたから、すべてにおいて当然彼は私の世話ができた。私は彼の助力を得て、パリでの一週間の生活とM市へ行く旅費をつつがなく準備することができた。

厳密に言えば、ヨーロッパでの私の数年間は、闘争から離脱していたといえる。私が10数歳で本省[陝西省]で新聞を発行し逮捕されそうになったり、日本から上海に行き来た新聞を発行するまでの経過に比べれば、私のヨーロッパでの数年間は実に闘争から離脱していた。上海を出発した時、私が中華工会¹⁰から、ヨーロッパで分会を組織するために委託された委任状は、図らずも無用の紙切れになってしまった。パリに着いたその日、私はその委任状と、海外から上海に帰国してきた一人の中国人労働者が書いてくれた在フランス中国人労働者工会への紹介状とを取りだして席帯均に見せ、彼にこの方面に関する連絡先の住所を教えてくれないかと告げたところ、意外にも軽蔑され拒絶された。彼は私よりも年上の地位を以て私に実際の活動に従事してはいけない、熱心に読書しS. vant [savant サヴァン(学者)]になるべきだ、と忠告した。当時、フランス滞在の中国人の間で有名なのは華倫^{かりん}だった。彼は無政府主義者である。聞くところによれば、すべての中国人労働者の団体と関係をもっているという。私はこの人はきっと私を援助してくれると思った。しかし、この人を訪ねて私の考えを話してみると、彼の返事は席帯均よりももっと失望するものだった。その瘦せて、薄い八の字髭の華倫氏は、意外にも私のこの問題に事寄せて、彼の哲学の講演会を開くに及んだ。先生宣はく、人類の出現以来、団体生活はみな当てにはならぬ、とのことだった。そのため私

は、要領を得ることなく彼のところを辞去し、ついに何の結果も得ることができなかった。

そんなわけで、私は私の願いを叶えることができなかった。しかし、私はまだ腐らなかつたし、周虚成のところ相談に行った。彼はかなり賛同してはくれたものの、しかし事前に中華工会と連絡をとる必要はない、まず私自身が独立して中華工会分会を準備したらよい、経費については、一番いいのはフランスに来たばかりの名士の伍××[呉稚暉]¹¹を訪ねることだ、と彼は言った。そして、第三者の資格でまず伍××と相談してやってもいいとまで言った。しかし、このことはついに私と蕩雲の関係が発覚して取りやめになった。以後、周虚成はもはや私と面会しようとはしなかつた。そしていわゆる名士の伍××も、すでにこのことを伝え聞き、しかもヨーロッパ到着後の私に固定した生活費がないことまで知ったため、彼は、会う人ごとに独断的に、私が工会[労働組合]の準備を利用して自分の生活を解決したいのだらうと言い、そして、これはチンピラの行動だ、という結論を導きだしたようだった。私の中華工会分会の準備計画はこのようにして実行できなくなった。言うまでもなく、これは私の当時の思想が未熟だったためにそうなったのだ。私はただひたすら上層知識分子の人物に頼ろうとしたのだが、しかし当時の私が接近したそれらの人物の中に、誠意を以て工会の事業に賛助できる者は、そもそも一人もないということを知らなかつた。しかも、いわゆる中華工会という機関は、上海ではずっと暇を持って余した失意の政客たちに利用されているだけで、私が上海を離れる時には、すでに多くの革命分子が参加していたけれども、しかし実際上はまだ影響力は弱かった。おそらく私がフランスに着いた翌年に、該会は責任者不在のため、自然に消滅してしまつたのではなかつたらうか。

ここでまず、席帯均について、述べておかななくてはならないことがある。それは、彼が私のヨーロッパ前期の生活にとって密接な関係があつたということである。私にとって帯均は、確かに多くの利点があつた。このことを私は、いまでもなお感謝している。しかし私たちはかつてプライベートな出来事で切れ目が入つたために、その後はずっと疎遠になつてしまつた。上海にいた時、彼はかつて劉喬牟[劉清揚]女史¹²を擁護する役柄を務めていた。劉喬牟女史は“五四運動”後に頭角を現した女性である。彼女の演説は当時であつて多くの青年をあつと言わせ、彼女に心酔する者は数知れなかつた。彼女がヨーロッパに留学したいと宣言した時、すでにヨーロッパに留学することが決まっていたそれらの男たちは、およそ彼女と往來のあつた者は、誰もがこぞつてヨーロッパに行つてから彼女に近づきたいと計画した。彼女より少し先に留学する者はヨーロッパで彼女を待っていると約束し、これから留学する予定の者は何とかして彼女と同船するための画策をした。喬牟はといえば、彼女の表面上での“一視同仁”の手腕を利用し、それらすべてを承諾していた。帯均はヨーロッパで彼女を待つと約束した一人だった。しかしどうしたわけかわからないが、喬牟は私に注目した。惜しいことに、当時の私はあまりに幼稚だったために彼女の好意を理解できなかつたし、むしろ迷惑に感じていた。帯均がフランス到着後に喬牟に絶えず手紙を書き、彼女に早く出国するように促した(このことを帯均と同室の友人が話してくれた)、しかし喬牟は私が上海を出発した日から毎週手紙を一通書き、私より先にフランスに届くように——言うまでもなく、実際は当時シベリア経由の郵便は不通だったため、それらの手紙は私よりも先にフランスに着くわけはなかつたのだが——と投函した。それらの手紙の中で、彼女は私に、彼女を忘れないようにと暗示し、彼女がすぐに私の後を追つて行くからと述べた。帯均にとって耐え難い事実は、それらの手紙がみな彼経

由で私に渡されたことであり、また同時に、彼が彼女に出した手紙については、たぶん返事が少なかつたらしく思われたことだった。まさにこのために、帯均の心には、私に対する反感が芽生えた。私が蕪雲とパリを離れる前の夜、私たちはいっしょに食事をした。その時、彼は突然、喬牟から郵送されてきた彼気付けの私宛ての全部の手紙をご披露に及んだ。しかもどの手紙もすべて彼によって、開封され読まれていたのだ。最も奇妙だったのは、彼がそれらの手紙を私に渡さないで、私の目の前で、蕪雲に手渡したことだ。当時、私は彼のそのような挙動について、訝しく思ったけれど、彼がふざけていて、何か思惑があるわけもないと思った。しかし図らずも、彼は計画的にそうしたのだった。そのことを私は、後になってようやく気づいた（その企図は、やはり彼と室友だった友人から聞いたのだが）。彼はそうしてから、すぐに喬牟に手紙を書いて、私が喬牟の手紙をわざわざ蕪雲に懇懇に献じたのは、私が喬牟を利用して蕪雲に歓心を買おうとしたのだ、と告げた。—— 疑いもなく、こんな話を女性に聞かせれば、聞いた者には必ず効果があるものである。果たして、喬牟から私にはもう手紙が来なくなった。しかし、まさに事実を捏造した彼のこの破壊行為は、その後、各人の生活に多くの変化をもたらすことになった。そして、それらの変化の中で、私と喬牟の受けた人生の苦しみは、最も深刻なものとなったといえる。現在、私はそれらの苦痛が私個人にもたらした教訓と鍛錬とを理解しているし、帯均のその行為に対しても、むろん少しも恨みはない。彼がすべきでないことをしただけでなく、しかもその後、さらに……とはいえてある。

帯均と私の不和は、このようにして始まった。

世界大戦が終わってからわずかに一年後、私がヨーロッパに着いたこの年は、まさに全世界の資産階級が彼ら資本主義経済の組織的な大恐慌を必死に救済しようとしていた時だった。それは、ベルサイユ会議[1919.1～5 パリ講和会議。19.6 ベルサイユ条約調印]からワシントン会議[21.11～22.2]に到る過渡期だった。その空前のベルサイユ平和会議の中で、列強各国は、強制的命令により、すべての弱小国家に対して、彼らの提出した賠償条件の同意を取りつけ、同時に多くの陰謀事件を引き起こした。互いに掠奪的な政治上における虚偽の協定を結んだ後、各地で継続して種々の会議を開いた。それはそれは実に賑々しい時代だった。

他方、ブレスト平和条約¹³後に巻き起こった被圧階級の闘争の風雲の中で、不幸な大事件が、私がヨーロッパに行ったこの年に、ちょうど満一周年を迎えていた。それはつまりベルリンの急激な政変だった。リープクネヒトとルクセンブルク¹⁴が流血して死亡し、さらに4、5ヵ月以前に終結したばかりの大事件¹⁵があった。それはハンガリーの混乱の変化だった。わずかにそこに新しい曙光の短い一閃が垣間見えはしたのだが、すぐに薄暗い勢力に一掃されてしまった。しかし、以上の2つの不幸な事件が起こった場所からずっと東のほうを見れば、その氷雪に閉ざされた国家はまさにこの一年で、とくにこの年の春の陽光に従って人類の熱血の巨大な流れを巨視の頂点にまで押しあげた。それとそれが最初に切迫した敵同士は、この時に一回激戦となったが、ついに歴史の血判の前で、巍然としてしっかりと立ちどまった。

しかし当時、私はこれらの事件に対して、抵抗不能だというあきらめから冷淡な感情を抱いたかのようにだった。このことは、解釈が簡単だ。国内で“五四運動”の逆巻く潮の中をくぐって来た当時の知識分子たちの多くはみな矛盾する心理状態にあったからだ。徹底的に悪の勢力と闘わなくては

ならないと感じながらも、もう一面では頑強な悪の勢力に屈服させられてしまい、常に意気消沈した気分の中に落ち込んだ。とくに私のような青年は、故郷で封建勢力の政治権力と諍いを起こした後、日本に行き、ほとんど自分を正確な軌道に乗せることがなかった時に、すぐにまたひょんなことで上海に戻り¹⁶、あの愛国運動の民衆大会の絶叫の中でも、あの“排日”機関誌の『救国日報』¹⁷の編集室の中でも、自分の内心の崇高な欲求に満足できずに、またさらに一步進めて労働組合運動に参加した。その中国の未曾有の最初のメーデー¹⁸の革命の大旗——初めて中国人の眼前に出現した——の下で、労働者の隊伍を追い散らす警察と口が酸っぱくなるほどの談判をした……— という行動の連続！ しかし悪の勢力は、やはり十重二十重に蟻の這い出る隙間もないほどに自分たちの周囲を囲んだ。自分たちの奮闘する数量を統計し、また得られる成績を考察した時に、いとも簡単に「お手あげだ」という観念が幼稚な意識を占拠してしまった。同時に、“五四運動”後の留学運動の中で、知識分子の多くには、2種類の矛盾する心理状態が現われた。一つはまず外国へ行き自分の能力を十分に養成してからまた帰国し有意義な事柄に努力するというもの、もう一つは、国内で打ち破られなかった暗黒の空気に圧迫され厭世の心情が生じて、別の社会に逃避したいと考えたことである。言うまでもなく、当時は私も、この矛盾する心理状態に浸った最もひどい一人だったかもしれない。まさにこんなふうにして——こんなふうにして暴風雨後の倦怠感をもって海洋を渡りヨーロッパに渡った。しかし思いがけずまた予想外の打撃に出遭った。それは、たとえば中華工会分会の結成が不可能になったことであり、そのことにより国内から携えてきた少しばかりの余力さえも失ってしまったことである。さらには呉荊雲事件のせいで、これまで仲が良かった数人の友人に見捨てられてしまったことである。そして自分の個人的生活にもまた、訳のわからない変化が起こったことである。押し寄せてきた種々の不如意が、ずっと実際問題に熱心だった私の性情を、転換させようとした。私は真に屈服したのだ。このことを思い出すと私は悲しくなる！ 私はほとんど自分の以前の、何度も大衆闘争に参加したことがある、そういう価値のある命を放棄し、消沈と頹廢の道に歩きだした…

真実を話さなくてなるまい！ 私の過去の傾向は、隠す必要はない、革命的民族主義の立場だ。だから上海で愛国の運動に従事したのだ。しかしそのような純粋な国家主義の空気は、私に息のできないような苦悶を感じさせ、工会の事業方面へと別に発展を求めさせた。しかも、私は『救国日報』に、「我らの今後努力すべきもの」という標題で、当時の中国の現状を分析した論文を書いた。その結論部分で、とくに K. Marx という中国ではまだ馴染みのなかった名前を挙げたことがある。その意図は、私たちは客観的方法で彼の学説を研究すべきだということだった。しかし今から思えば、当時のそういう議論の来源は、日本の数種類の雑誌から得た知識以外では、自分でもその他の出所は考えられない。自分が提出したその学説の内容については、自分でも一体全体どういうことなのかわからなかった。これは工会の活動に参加したのと同じ心理だった。つまり、自分はただこう思ったにすぎないのだ。つまり、専ら愛国を吶喊するのに、如何ほどの道理もないのだ、前進しさえすればよいのだし、より新しい理論を提唱しさえすればよいのだ、と。簡単な憧憬と簡単な過激思想が私の頭を満たし、工会の活動の中でわずかに労働者が集会や行進をするよう主張することを知っていただけだったし、その他にはほとんど何も知らなかった。しかしともあれ、私の当時の思想の中心は一個の骨子を持っていた。その骨子とはまさに中国民族を独立させることだった。しかし同

時に否認できないのは、一方で私も社会主義の色彩に染まっていた——これは当然ながら矛盾している——ことだ。私は思うのだが、私がヨーロッパに着いてから数年の間の社会事業との絶縁は、たぶんやはりそういう思想上の矛盾のせいだったのではなからうか、と。そして、その後、私の唯美派の芸術への耽溺も、おそらくはそういう矛盾の中で出口を探せないために夢幻の美の雰囲気の中に逃避したためではなかったのだろうか、と。

とはいえ、M市での生活は、私にとっては実に有意義だった。フランスのM市は、この市自身については何の言うべき価値もない。この市はベニスやフローレンスではないから、心引かれる特色もない。しかしこの市は、中国革命と密接な関係があったのだ。最も早くここに来た中国人は、おそらく中国の名士の李××[李煜瀛]¹⁹だろう。彼は、この市立公学の校長とまず仲良くなった、その後、勤工儉学の留学運動が起こると、彼はすぐにこの校長と交渉し、中国から来た学生をできるだけこの公学に収容しフランス語を学ばせると同時に、寄宿や食事も、費用は少し安くなるように尽力した。言うまでもなく、その校長は金儲けのために承諾したのだ。寄宿舎と食堂が中国人学生によって学校の秩序が保てないほどになったり、中国の農村からやってきたばかりの山だしの中途半端な知識分子も、この人の群れの中に押し込められて留学生に納まってはみたが、その飛躍した生活に、彼らはまったく馴染むことはできなかった。教室での喧騒や公共の場所での不潔さは、常にフランス人学生と衝突を繰り返していた。しかし、すべてそれらは大した問題にはならなかった——なぜなら、校長が頑として、取り合わなかったからである。それらの多くの中国人の学生の中には、多種多様な人物がいた。そしてその後、1925年から27年までの中国大革命の中で重要な役割を演じる人物もみなここに集っていた。多くの闘争の運動はすべてここから勃発した。公使館を包囲して“教育権”を要求したことと、リヨン中仏大学を占拠したことは、当時の2つの有名な事件だった。この公学の中では、オーバーに言えばこのM市全体の都市の中でさえ、中国人留学生の姿がフランス人を覆い隠してしまうほどに多かった。ここに住んでいた中国人女性も多かった。その後、革命で死んだ向金綺[向警予]²⁰や、そのほぼ10年後に私とかなりの期間恋人だった蔡含稀[蔡暢]²¹は、当時の女子学生の中で最も苦学した者たちだった。蕪雲とかつて上海に長い間住んでいた2名のお嬢さん以外の女子学生たちは、大部分が中国内地からまっすぐ外国にやってきた者たちだった。彼女たちは中国内地で着ていた服装を着てM市に来た。布スカート、布靴、くつ下さえも農村で履いていた白布のくつ下だった。要するに、当時のM市は、中国“五四運動”以後の一部の艱難辛苦した進歩的知識青年が合流していた場所だった。それらの人たちはみな時代の波に従い突然変異の方法で自分の生活を改め、このヨーロッパで最も無名の小都市の経済条件を利用し、自分の知識能力を養成しようとした。彼らはヨーロッパのすべての物質的な楽しみを享受することを知らなかったし、また出来もしなかった——彼らはヨーロッパに住んでいたのだけれど——彼らは一日中研究ばかりしていた。新聞と政治的パンフレット(新聞“L'Humanité”[リュマニテ。Humanité ユマニテは、人類の意]はほぼ全員が読んでいた)こそが、彼らのフランス語の教科書だった。彼らは討論し、組織し、革命戦士となる準備をしていた……

言うまでもなく、私はそれらの学友たちの中で特殊な階級の立場を保っていた。私は彼らの討論やその他の運動に参加したことはなかった。私はただ傍で援助や応援の活動をしていただけだった。当時、私は元気がなかったし、当時の文化特権を有していた上層分子に対する依頼心を完全には脱

却していなかった。私は、断固としてそれらの学友たちの中に溶け込むことがなかった。私の密接な友人は、まだ席帯均のような名士に援助を受けている者か、官費で来ている者たちだった。しかし私の思想傾向は、それらの学友たちに近かった。彼らは私に影響を与え続けていた。私は、その後新しい方向に転じたが、その新しく転向した私の思想の中に、当時の彼らの思想の一端を垣間見ることは難しくない。

向金綺はそれらの学友たちの中で最も傑出した人物である。彼女はすべての中国人女子学生を指導してだけでなく、同時に男子学生の中の進歩的分子をも指導していた。彼女は生まれながらの革命家である。彼女にはすべての人為的習慣を破壊する勇気があった。彼女の弛まぬ努力と卓越した才能は、女性の中では稀なことだ。彼女と蔡含稀の兄[蔡和森]²²はその時すでに結婚していた。2人が街に出かけた時はとくに注目を浴びた。彼女は少しも着飾っていなかった。髪の毛はショートで、中国の農村の黄色い布のシャツと黒い布のスカートだった。彼は髪の毛は肩まで伸びていて、布の洋服はどれも皺だらけ、襟は黒く変色していたり……しかしこの2人は当時のM市の中国人学生の中心だった。この2人が何かの会議を招集したり、2人が別の誰かと何かの問題を討論するのを約束したり、とくに向金綺は、青白い顔にあふれる真実で積極的な精神と誠意ある表情、明瞭で鋭い言葉から迸る的確で明晰な思想、それは誰も彼女の前で敬服してしまうものだった。10年後、この革命的女傑が偉大な犠牲者として、消滅してしまった時に、彼女の敵でさえも彼女を惜しんだ。彼女の才能は、彼女の人格と同様に、出会った人の記憶にいつまでも残った。

そのような記念すべき人たち以外に、なお別の分野での少数の人たちがいた。たとえば、その後、国家主義のリーダーとなった曾璽[曾琦]²³はその一人だ。曾璽はもと私が『救国日報』にいた時の同僚だった。彼は少年中国学会と関係のある人物の一人だった。彼は徹頭徹尾、滑稽な役柄だった。年齢は当時でも30数歳にすぎなかったろうが、彼の体つきの不健康さと、誰に対しても先輩風を吹かす癖で、まるで年寄りのように見えた。私はそれまで彼が本を読んだ姿を見た例がなかった。彼は毎日誰かと閑談していた。時には自分が作った古詩を歌うような調子で諷刺するのを、嫌がる人に無理やり聞かせたりした。M市の中国人留学生の環境の中で、彼は真に特殊な人物と言えよう。私に対して、彼はもともとかなりな友誼を抱いていた。しかし、私と翦雲との関係をめぐって、彼から極端なまでに反対だと表明され、私と彼との友誼は、次第に悪化した。私と翦雲の事件に対する彼の反対は、もとより翦雲の前の恋人の汪廣季が彼の一番の親友だからだが、実は彼が、そもそも私のように翦雲に近づけないというのが真相だった。この事件はこの裂け目を促成したにすぎなかった。ある時、彼は別の人間に、私と翦雲の関係が精神的な範囲を超えている、だから私は銃殺されるべきだ！ と話していたのを覚えている。当時、私は彼の思想が極端なNe phop'a²⁴方面にまで進もうとは知らなかった。それは彼の潔癖さの表現にすぎないのではなかったのではないかとと思う。以後の彼の全人格が私と完全に背馳した時になって、彼はたぶんその時よりもっと私が銃殺されるべきだ！ という思いを強くしたのではないかと……と思う。

私はこのようにしてM市に住みはじめた。私は公学の寄宿舎に住まずに、フランス人の家に住んだ。私は自然科学の研究とフランス語の作文の練習に没頭した。また私は大家さんから60歳近い年齢のラテン語の専門家を紹介してもらい、その人の前で古書の頁を開きながら、Cicero [キケロ。

BC106～BC43. 共和政ローマの政治家、哲学者]から Virgilius[ヴェルギリウス。BC70～BC19. 古代ローマの詩人]まで、数多くの宗教の名著を選んでもらって読んだ。

翦雲と私の感情は、いっしょにいればいるほどますます打ち解けられなくなっていった。彼女の浅薄な行動や彼女の終始改まらぬ虚偽のために、いつも私は苦痛を鎮めることができず悩まされていた。私の性格は次第に暴虐的になっていった。時として私は彼女と激しく罵りあい、読みかけの本を引き裂き、外に飛びだしては、自殺しようと考えた。お話にもならないが、当時の私には多くの幼稚な習慣があったし、虚栄心の強い女性に対する経験というものもなかった、しかし翦雲の気性も止まるところを知らない頂点に達した。彼女は完全な高慢さでもって自分から男性を愚弄した。快楽と憤怒がともに彼女自身の突然の衝動に突き動かされてしまい、彼女はそれを抑制する方法を知らないままに、相手に対して絶対的に残酷窮まる仕打ちを行った——それは私たちの生活を長く一本の線の上に置くことを不可能にした。私たちは2人も互いに一つの予感があった。つまり、将来必ず互いに別れる日が来るだろうという予感だ。これはあたかも真に日々現実のものに近づいていった。ついに抵抗しようのない重大な変化が、私たちがいっしょにいた4ヵ月の後²⁵に、突然起こった。

事の始まりは、マルセイユからM市に来た何人かの中国人留学生のもたらしたニュースだった。ある日、新しくM市の公学に入学した学友を歓迎するために、皆は公学のある教室に集った。数人の新しい学友たちは、歓迎会の主催者側に対して、一人ひとり外国に来た動機を述べた後に、続いてすぐに、国内を出発してからの旅程の様子についての自由な報告に移った。と突然、一人の新しい学友が叫ぶような声でこう言った。

「ぼくたちの今回の海路で、面白いニュースがもたらされました。それは、劉喬牟と陳洪巖^{ちんじゅうげん} [張申府]²⁶が……」

この2人の名前を言ったとたんに、その数人の新しい学友たちは一斉に大声で笑いだした。これは私にとって大きな驚きだった。喬牟は本当にフランスに来たのか……陳洪巖という名前を、私は前に耳にしたことがある。彼は北京大学の助教で、同時に五四運動後に頭角を現した一人でもあった。

「劉喬牟と陳洪巖は船上で、とんでもなく仲が良かった。」その新しい学友は、続けて次のように語った。2人はこっそり公共の浴室に入りデートしたが、思いがけずひょうきんなボーイに見られてしまい、浴室のドアを外側から鍵をかけられてしまった。結局、陳洪巖が窓を壊し、窓から這い出したため、一時船内の人たちは大騒ぎになった。外国人は怒って、中国人は秩序を乱している、実にけしからんと罵った。中国人も義憤を感じ、危うく劉を監房に押し込めようかという事態になり、また、陳を船から降ろしてしまおうかということにまでなった、という。

この報告は、私に不調和な2種類の感情をもたらした。一つは何だか自分の身体が半分軽くなったかのようなようだった、喬牟に対してずっと抱いていた責任が完全になくなったからだ。もう一つはしかしまたかすかに胸の中で疼くものがあった。まるで何かを失くしてしまったかのように。喬牟はもう私のものではないのだと思った……正直に言えば、喬牟の年齢は私よりも何歳か上であり、お世辞にも美人とは言えなかった。彼女のその北方特有の美しくない顔には、美感を重視する若者を引きつける輪郭はなかった。もしも彼女と翦雲を比べるなら、この点に関しては、彼女は負け組で

しかない。しかし私にとって、彼女は翦雲など比べようもなく魅力的だった。その理由は明白だ。つまり、一般の女性では絶対出来ないような、社会運動のために奔走する彼女の能力を、当時の私は完全に心服していたからだ。五四運動以後の知識分子は誰もが、破壊的で狂暴な時代を経験しているために、各人の興奮はみなまだ消滅していなかった。すべての問題は全部、当時の社会に反抗するという一点に絞られていた。友人の結合も、当然そういう気持ちに基づいていた。喬牟が上海で多くの知識青年に囲まれることができたのも、そういう理由からだった。当時の私もまた、言うまでもなくそれらの同時代の青年と同じように、懸命に事業に従事する友人を敬愛していた。とくに女性の友人なら、当然ながら、なおさらのことだった。上海にいた時、私には喬牟と恋愛したいという動機はなかった。しかし私が、常に彼女の傍にいたいといつも願っていたというのは、事実である。フランスに来て彼女の手紙を受け取ってからは、私は何日も苦悶の中にあつた。私は私自身が彼女に近づいた時に、すべてを洞察できなかったことを後悔した。私は、運命が私に対して行った愚弄を恨んだ。翦雲の度を過ぎたお嬢様ぶりに辟易していた私は、ますます喬牟を傾慕するべきだったと悟った。

ところが、いま客観的事実がもたらされた。私が新しい学友の報告を聞いた後、ほぼ4、5日過ぎた頃、喬牟と陳洪巖の2人に対する大多数の留仏学生たちの攻撃のどよめきが聞こえてきた。「劉喬牟は風呂に入り……」という言葉が、ほとんど普遍的なトピックのタイトルになった。陳洪巖などはこの事件のせいで、当時のリヨン中仏大学[1921.10, 創立]を準備していた中国人委員から、中仏大学の官費入学を取消されてしまった。一番不思議だったのは、上海でかつて喬牟と同船し洋行するのを彼女に頼んでいたか、あるいは予め洋行した外国で彼女を待つ予定にしていた、思想解放運動に従事したことのあるそれらの人たちが、その時まるで約束していたかのように一致して、喬牟に対して軽蔑の悪罵を浴びせたことだ。実を言えば、当時のヨーロッパ在住（少なくともフランス在住）の中国の知識分子は、M市に滞在していた一部の艱難辛苦の留学生たちを除いた、およそ官費を給付されたり、名士の援助を受けたりしていた留学生たちのことだが——たとえすでに国内で新文化運動を担った中堅であったり、その他の名声を得ていたにしても、また、彼らの大半の者が学士か博士の地位を取得したとしても——その大多数の者は、思想と行為が非常に矛盾した人たちだった。彼ら自身は簡単に入手できる手持ちの金を湯水のように使いながら、ヨーロッパで一番繁華な場所で放蕩、享楽三昧に及びながら、ほとんど他人に対しては禁欲主義の立場で非難したりした。喬牟と陳洪巖の関係は、当時の私から見て、正しくない理由など少しも見いだせなかった。だから、文明の極度に発達したヨーロッパに留学している中国の上層分子たちがまさか、彼らの関係を最大の罪惡と考えたとは、実に予想外だった。——しかし、このことは説明不能というわけではない。つまり、本来ヨーロッパの極度に発達した文明こそは、一種矛盾の基礎の上に建造されたものだからである。私たちは、ただ次のことを見ればわかるだろう。すなわち、いままさにヨーロッパ各国で政権を握っている如何なる敏腕な政治家もみな、一方で語るべき道徳が存在しなくなるほどの資本主義の発展を放任しながら、もう一方ではすでに死んでいる封建道徳の形式を引きずりながら民衆を裁こうとしているに違いないということである……これが、まさに当時の私たちのような留学生の学ぶところの時代の精神だった。

喬牟への仕打ちの冷たさに対して、長い間不満を抱いていた私は、彼女を慰める手紙を書いたこ

とがあるのを覚えている。当時、彼女と陳洪巖はベルリンの田舎に滞在していた。彼女は誠実に私に返事を書いてくれた。彼女を攻撃したその留学生らに対して、彼女は徹底的に批判した。彼女は、当時彼女を最も手厳しく攻撃した人たちこそ、かつて彼女と最も仲の良かった人たちだったと述べていた。そして、それらの人たちはみな、将来、既成の権威の下に頭を垂れる投機分子になるだろうと断定した。——確かに、喬牟の言葉は的中した！ 現在までずっと、一人ひとりそれらの留学生の名前を挙げていった時に、私は、どうしても驚きを禁じえなかった。なぜなら既成の権威の輪を跳び越えることができた人を見つけることができなかつたし、革命の最前線にまで突き進んだ人を見つけることができなかつたからだ！

しかし、私は、喬牟の以後の生活が墮落してしまったことを否認することもできない。彼女は一般女性に欠けている度胸や勇気があった。しかし虚栄心が強すぎて、同時にまた物事を大袈裟に言う癖があった。陳洪巖のように、一定の主張のない人との共同生活は、彼女にとってとても大きな不幸だったと言えよう。彼女や向金綺や蔡含稀は、みな中国のここ数年来絶えず逆巻く革命の大波の中を駆け抜けた女性である。能力からいえば、彼女は後者の2人より劣ってはいなかった。しかしその後の彼女は進歩しなかつた。彼女は完全に社会的活動を放棄してしまい、保守的な家庭生活の中に埋もれてしまった。

喬牟と陳洪巖の結合は、実は私と大いに関係があった。これは、後で喬牟に一番親しくなった人から聞いたことだが、喬牟は国内から洋行の途に就く前に、私のことを話題にし、彼女が非常に憤慨しながら、いつか必ず私に対して、それに見合った報復をしてやらなければならない、と言ったという。疑いもなく、これは彼女が、私と翦雲が恋愛しているという帯均からの報告の手紙を受け取ったための態度だった。当時、喬牟はすでに船の座席を買ってしまっていたし、上海の各種の新聞には彼女の洋行のニュースがすでに掲載されてもいた。だから当然、彼女は私を追跡する希望が失われたからといって洋行の計画を取りやめることはできなかつた。いわゆる私に報復するというのは、彼女がヨーロッパに着いたら、すぐに誰からも称賛されるような夫を伴って私に会うことだった。彼女は、小説に書いてあるような恋敵同士による恋の鞘当てを試みようと思ったのだ。結局、言うまでもなく陳洪巖が、彼女によって夫になる役割をあてがわれた。聞けば、陳洪巖は実はいっしょに洋行した恋人がいたというが、喬牟がその一ヵ月余りの船上生活の間にさまざまな手練手管を用いてその女性の地位を奪い取り、自分の計画を成功させてしまったのだ。

天下の出来事は、往々にして一時の衝動で動くような甘いものではない。喬牟は、彼女と陳洪巖の結合が多くの人の無意味な攻撃を引き起こしたとは、夢にも考えることはできなかつた。彼女にとって、これは最も耐え難い刺激であったろう。彼女は大きな幻想を抱いていた。つまり、ヨーロッパに着いても、国内での活動と同じように活動できると思っていたのだ。少なくとも彼女は、渡欧している中国人留学生の中で組織を作り、リーダーとしての活動をしようとして準備していた。しかし、思いもかけず、少しも実現しなかつた。彼女は私に会うという願いさえも叶わずに、陳洪巖とベルリンの鄙びた田舎で暮らすはめになった。しかも——それは私にとって、実に遺憾なことだ！——今に到るも、私は彼女に再会していない。そして、彼女が私に書いた手紙は、全部で20数通になるが、私はM市を去る時に、それら全部を、一年余り過ごしたあの大家さんのストーブの中に投げ入れ焼いてしまった……

さて次に、このようにして喬牟がヨーロッパに着いた後に、私と蕪雲の間に起こった変化について述べよう。それを述べたからといって、誰も信じないかもしれない。なぜなら私の出会った人たちは、みなあまりに小説中の登場人物に似すぎているからだ。とはいえ、私は、私の書くことがみな事実だという責任を負うことができる。次に、喬牟に代わって、小説の人物になるのは、帯均だ。彼は情勢の急変のために、突然、私と蕪雲の生活の中に闖入してきた。

帯均は、策略を用いて喬牟を自分の女にしようとした。それは彼からみて非常なる自信があったからなのだろう。しかし、思いがけず手に入れたものは、予想とは正反対の結果だった。おそらく彼は、喬牟が夫を伴ってヨーロッパに赴くとは夢にも思わなかっただろう。これは彼にとっては、言うまでもなくまったく予想だにできなかったことだった。そのショックの大きさは言葉にできないくらいだったろう。帯均の性格は、喬牟と真にそっくりで、どちらも強靱な個人主義のような英雄的色彩を有していた。自分と関係のあることについては、必ず是非にも勝利を勝ち取るまで手を緩めようとししないのだ。喬牟にメンツをつぶされる仕打ちを受けた帯均は、まるで錯乱したかのようになり、彼女に返すべき彼の怒りを思い切りそっくりそのまま私にお返ししてきた。彼は蕪雲と私の仲を裂こうとしたのだ。つまり、蕪雲を彼の所に来させて、喬牟の身代わりにさせたいと言ってきた。彼の行動は迅速だった。あつという間に M 市の私に——しかし、これは説明するまでもなく、当然、偽りの訪問だった——会いに来た。まさに彼の訪問中に、彼は蕪雲と密約(その時の私の何とおめでたかったことか!)を交わし、1週間後に、2人が、M市から1日の旅程を要するJ市に行き、同棲することを決めていたのだ。

訳 注

- 1 1920年の春：周永珍著『留法紀事：二十世紀初中国留法史料輯録』（国家図書館出版社、2008年7月）所収の「留法勤工儉学生姓名、批次表」によれば、王独清は、第15陣の勤工儉学生団とともに、1920年5月9日上海出港、6月15日マルセイユ到着の「アル芒勃西号(Armand Behie) (法)」[Armand BehieはArmand Béhie アルマン・ベイの誤記か?]でフランスに渡った。同船者は130余名。同船者のうちの四川省16人の中に、呉若膺、胡蜀英、王耀群の3人の女性がいた、という。鄭曉方記録「鄭超麟談蕭三、王独清」（『新文学史料』1991年第1期）によれば、呉虞（呉又陵）の娘・呉若膺がこの自伝小説の呉蕪雲のモデルであるという。
- 2 新文化団体。テキスト（1998年12月、遼寧教育出版社）の原文は「新文化潮体」だが、（1936年6月再版、大光書局）版では、当該箇所印刷不鮮明で、「新文化團體」とも「新文化潮體」とも読める。ここでは文脈からみて、「團體」と判断した。
- 3 少年中国学会。新文化運動時の青年団体。1918年6月に発起、翌19年7月正式成立。北京に本部、南京、成都、パリに分会を置き、上海、天津など各地に会員120数名を持った新文化運動期でも最大規模の団体。“科学精神に基づき社会活動を行ない、少年（青年）中国を創造する”ことを趣旨とし、雑誌『少年中国』などを刊行して啓蒙運動を展開、新社会の理想や到達手段について誌上や会員大会で討論を行なった。だが、同会には、李大釗らマルクス主義に傾斜する者、王光祈らユートピア社会主義者、左舜生ら国家主義者が混在、会員の大部分は教育や科学技術による社会改良を志向したため、意見の分岐は避けられなかった。25年7月の南京大会を最後に活動を停止。（天児、石原、朱、辻、菱田、村田編『岩波 現代中国事典』1999年5月、岩波書店）
- 4 周虚成は周太玄（周無）を指す。周太玄（周無）1895～1968。四川の人。のちに周無と改名。1918年、李大

- 釗，曾琦，王光祈らとともに少年中国学会の準備会を結成，翌年に発足。19年，渡仏留学し「旅欧周刊」を創刊。30年，帰国し，四川大学理学院院長。建国後，重慶大学校長や中国科学院翻訳局局長などを歴任。（鄭超麟著，長堀・三好・緒形訳『初期中国共産党群像2——トロツキスト鄭超麟回憶録（全2巻）』（平凡社，2003年2月。東洋文庫712）所収の「人名索引・主要人物注」）。
- 5 潘大道（字は力山）を指す。1888～1927。四川・開県の人。日本に留学し，早稲田大学政治経済科を3年で卒業。中国同盟会に参加し，革命運動に従事。1910年冬，帰国し北京に赴く。11年，四川法政専門学校の教授に任じ，萬県に赴く。武昌起義勃発し，成都に赴き，軍政府法制局局長に任じるも，すぐに辞職し，共和大学教務長となる。13年，二次革命勃発し，上海に赴く，中国公学教授に任ず。16年の袁世凱の死後，四川督軍羅佩金の要請を受け，督署秘書となる。16年8月，第一次国会回復し，参議院議員に当選するも，上京せず，四川政務庁庁長に任じる。一時，省長を代行するが，すぐに上京し北京大学教授に任じ，1919年冬，米国に留学し，1922年に帰国，国会議員に任じ，憲法起草委員会委員に就任。24年11月，国立北京政法大学教務長に任じる。三・一八事件の後，26年秋，上海法科大学の副校長に任じる。27年夏，国民革命軍總司令部が南京で政治工作員養成所を創設し，教官に招聘される。27年秋，上海法科大学に帰り，『議論旬刊』を創刊。27年10月14日，暗殺される。著書に，潘大達編『力山遺集』（1932年1月，上海法学院）がある。（『民国人物大辞典』1991年5月，河北人民出版社）。『吳虞日記・上冊』（1984年5月，四川人民出版社）所収の「師今室日記」1920年5月31日に，「桓女〔4女〕，潘力山より来信。去る4月13日に，アメリカ・サンフランシスコのアメリカ総領事署で正式に結婚式を挙げた，という」の記述がある。
- 6 周虚成は周太玄（周無）を指す。周太玄（周無）1895～1968。四川の人。のちに周無と改名。1918年，李大釗，曾琦，王光祈らとともに少年中国学会の準備会を結成，翌年に発足。19年，渡仏留学し「旅欧周刊」を創刊。30年，帰国し，四川大学理学院院長。建国後，重慶大学校長や中国科学院翻訳局局長などを歴任。（鄭超麟著，長堀・三好・緒形訳『初期中国共産党群像2——トロツキスト鄭超麟回憶録（全2巻）』（平凡社，2003年2月。東洋文庫712）所収の「人名索引・主要人物注」）。
- 7 趙斯年は趙世炎を指す。趙世炎1901～1927。四川の人。五四運動に参加し北京高等師範附属中の学生会幹事長になる。李大釗らの少年中国学会に参加後，工誥主義を唱えて，『工誥』を創刊。1920年渡仏し勤工儉学生となる。22年張崧年らと中共欧州支部を結成，同年少年共産党を組織し総書記となり，のち中共欧州支部のフランス支部責任者を務める。モスクワ留学後の24年帰国し，北京のちに上海で活動したが，27年国民党に逮捕銃殺される。（同上注6）。
- 8 熊尊韻は熊銳を指す。熊銳1894～1927。広東の人。日本留学を経て，1920年渡仏し勤工儉学生になる。22年の少年共産党結成に参加，のちにドイツに行き25年帰国。黄埔軍校教官となるが，27年4月，国民党に殺害される。（同上注6）。
- 9 王光祈を指す。1892～1936。字は潤與，筆名は若愚。四川・温江出身。1914年，北京の中国大学に入学し，法律を専攻。18年6月，卒業の後，成都『群報』『川報』の首都駐在記者となる。18年6月，李大釗らと少年中国学会の組織を發起し，籌備処主任に任じる。翌年，執行部主任に当選。五四運動中は『新青年』『少年中国』等の雑誌に投稿。列強反対，軍閥反対の宣伝を行い，同時に無政府主義の実行を主張した。19年末，北京工誥互助団の組織を發起するが，失敗する。20年4月，ドイツに留学。フランクフルト大学に入学し，政治経済学を専攻。上海『申報』『新聞報』のドイツ駐在記者に任じる。22年，ベルリンに移り，専攻を改め，音楽を学ぶ。26年にベルリン大学からボン大学に移り音楽の研究を継続。31年の9・18事変後，ベルリンとフランクフルトの各新聞に，日本の中国侵略反対の文章を発表する。32年11月，ボン大学東方学院の講師に任じ，中国の文芸を講義。34年に音楽博士の学位を取得。36年1月12日，ボンにて病死。44歳。著書に，『西洋音楽與詩歌』『西洋音楽與戲劇』『中国音楽史』がある。訳書に『西藏外交文件』『庫倫条約之始末』『美国與滿州問題』などがある。ドイツ語の著述に『中国古代之歌劇』がある。（『民国人物大辞典』1991年5月，河北人民出版社）。
- 10 工会は労働組合の意。該会は，1918年に発起，19年4月に成立。19年8月25日に正式に成立大会を開いた。会長は，陳家鼐。会員数は47,500人。19年6月，第2回総会で陳家鼐会長，李榮魁副会長，陳国樞總務科長，伍行敦文書科長らの役員が決定。（『講座中国近現代史／第4巻』1978年7月，東大出版会）
- 11 伍××は吳敬恒（字は稚暉）を指す。吳稚暉，1865～1953。本名は初め眺，後に敬恒と改める。稚暉は字。江

- 蘇・陽湖県出身。1901年春～02年夏まで、日本留学。05年冬、同盟会に参加。06年12月、パリに赴き、張静江、李煜瀛らと世界社を創立し、中華印字局を設立。07年6月に『新世紀』を発刊し、民主革命を鼓吹し、ブルードン、バクーニらの無政府主義学説を紹介。09年、家族をイギリスに移住させ、ロンドンで英語を学び、写真銅版術等の印刷術を研究し、化学、物理、天文、人種等を学び『天演図解』『荒古原人史』を翻訳、『上下古今談』等の科学知識読物を書く。辛亥革命後、11年12月、帰国し、上海に到着。12年、呉敬恒は蔡元培らと進徳会を発起。13年、第二革命失敗後、呉はイギリスのロンドンに逃亡し、後にパリに赴く。15年夏、呉は李煜瀛、蔡元培、汪精衛らとパリで留法僑学会を発起し、その後また華法教育界を組織。18年には上海で留英僑学会を創設し、勤工儉学運動を唱導。呉はリヨンで中法大学創設を準備し、21年に創立し、学長に任じるが、勤工儉学の青年の入学を拒否し、学生運動を引き起こす。また経費調達にめどが立たず学長を辞職、ロンドンに赴く。23年イギリスより帰国。49年2月、上海より台湾に赴く。53年10月、病死。（『民国人物伝』第12巻、中華書局、2005年9月）。
- 12 劉喬牟、劉清揚を指す。1894.2～1977.7。天津出身、回族。中共初期の活動家。五四運動に積極的に参加。天津各界連合会常務理事。後に覚悟社に参加。20年11月24日上海発の蔡元培の教育視察団一行とともに勤工儉学として渡仏。（上海辞書出版社、96年5月『現代上海大事記』の20年11月24日の項には、「22日、蔡元培は北京から上海に到着。今日、学生・劉清揚らとフランスに向けて乗船した。上海を離れる前に、北京大学在上海同人・馬寅初らが蔡元培を招宴し、全国学連・李達らが劉清揚の送別会を開いた」との記述がある）。この時、劉はパリ大学中国学院に赴任する張申府と同船、船上で張から2度目の共産党入党へのオルグを受ける。20年12月27日マルセイユ着。21年初(或は2月?)、パリで、張の紹介で中国共産党に入党。同年2、3月頃、張と劉は周恩来を共産党に入党させる。その後、中共黨員の趙世炎、陳公培らが来仏し、彼ら5人はパリで中国共産主義グループを組織した。21年、パリで張と結婚。22年2月、劉と張と周恩来は、ドイツのベルリンに赴く。同年3月、劉、張、周、張伯簡4人で中共駐独グループを成立させた。22年6月、パリの駐欧中国少年共産党で活動する。23年冬、ドイツからソ連経由で帰国。帰国後、天津で活動し、『婦女日報』を発行。23年、党の第3回代表大会の決定に従い、国民党に入党。24年春、広州に移動。同年5月、李大釗とソ連に赴きコミンテルン第5回代表大会に参加。24年冬、上海に派遣。25年春、北京の国民会議促成会全国代表大会に参加、促成会常務委員に選出される。27年1月、武漢に派遣。27年7月、7・15政変後、国民党を脱退。その後、共産党を離党。抗日戦争勃発し、抗日活動を行なう。48年秋、張が「平和を呼びかける」を発表し、国民政府への投降と擁護の立場を公表し、同年12月、張と離婚。61年、再び入党。68年、文革中に迫害を受け、逮捕、投獄され、7年半後の75年5月に釈放。77年7月、無念のうちに死去。79年8月、名誉回復。
- 13 プレスト平和条約：プレスト＝リトフスク条約。1918年3月3日調印。ドイツ、オーストリアとソ連の講和条約。ソヴィエトは広大な領土を奪われたが、戦争から離脱。条約内容は、18年末のドイツの敗北で無効となった。
- 14 リーブクネヒト：カール・リーブクネヒト 1871～1919。社会民主黨員で、開戦時にただ一人反戦を主張。スパルタクス団を指導。19年蜂起後に右翼軍人に虐殺された。ルクセンブルク：ローザ・ルクセンブルク 1870～1919。ドイツの婦人革命家。修正主義論争でドイツ社会民主党左派を理論的に指導。スパルタクス団の1919年蜂起後に虐殺された。
- 15 大事件とはハンガリー革命を指す。敗戦と独立の混乱期に、ハンガリーは1918年11月に、ロシア革命にならって社会党・共産党独裁のソヴィエト政権を樹立したが、性急にすぎた反対も多く、フランスの支援するルーマニア軍の侵入によって、19年8月、ソヴィエト政権は崩壊した。
- 16 王独清の日本留学期間は、鄭伯奇「創造社後期的革命文学活動」（原載、1962年8月『中国現代文芸資料叢書』第2輯）の回想によれば、1918年から20年初までである。（李建中「王独清生平考辯」（『新文学史料』1994年第3期）参照）。
- 17 『救国日報』：馬光仁主編『上海新聞史（1850～1949）』（復旦大学出版社、1996年11月出版）所収の「第5章 民初報業的艱難步履」「二、革命党新宣言陣地の開創」には、『救国日報』についての言及がある。孫中山が1914年に日本東京で中華革命党を再建した後に、上海で『民国日報』が創刊された。該紙の趣旨は「擁護共和、發揚民治、国民奮闘を喚起する精神」で、その主要な態度は次の4つである。(1) 護法の旗を高く掲げ、

- 北洋軍閥の反逆行為を糾弾すること、(2) 北洋軍閥の売国背信行為を暴露すること、(3) 日本帝国主義の侵華の陰謀を暴露すること、(4) 新文化運動を支持すること。以上の4つであるが、「革命党員の支持の下に、同様な態度を持ったものに、『中華新報』と留日帰国学生が創刊した『救国日報』などがある。」
- 18 中国の未曾有の最初のメーデーは、1920年5月1日、上海で開催された。この時のメーデーについて、『現代上海大事記』(1996年5月、上海辞書出版社)は次のように記している。「△上海工商学界は第1回のメーデー慶祝を行い、「各大通りには多く旗を掲げ慶祝した」。陳独秀、施存統、陳望道らは滬衷中学で集会に参加した。午後1時、電気工界連合会、中華工界志成会、中華工会總會、中華工業協会、中華全国工界協進会、船務棧房工界連合会、業業友誼連合会等は各業の人士を招集し、メーデー記念大会を挙行了した。その数都合3,4000人。デモをしながら「学聯總會日刊」や各種のビラを散布した。集会で大衆はまず西門公共体育场に行くが、軍事警察の制止に遭い、再び精武体育会に行くが、また工部局の禁阻に遭う。また青年会グラウンドに向かうが、やはり軍事警察の阻止に遭う。最後に靶子路の荒地に移動し集会を開き、工商学各界の代表が次々に演説し、次の3つの提案を通過させた。(1) 各業は毎日8時間労働、毎週48時間労働を要求すること、(2) 各業は純潔の労働組合を組織すること、(3) すべての種類の工業は、一律に連絡を取り合うこと。夜8時に、上述の7つの労働組合の代表は工業協会で緊急会議を開き、一致して「上海労働者宣言」「ロシア農政府の通告に答う」の発表を通過させ、今後「労働組合が真っ先にやるべきは分業組織に注意すること」を決定した。夜11時に到り散会した。同日の夜、護理松滬護軍使・何豊林は北京政府及び浙省督軍、兼理松滬護軍使・盧永祥に打電し、本日の勞工記念会は臨時戒嚴法に照らし勸告指導が妥当であり、即刻解散すべしと謂う。同日、北京、広州、香港、汕頭、九江などで「五一」を慶祝する活動を行なった。」
- 19 李煜瀛(字は石曾)を指す。李煜瀛, 1881~1973。河北、高陽出身。1902年、隨員の名義で清朝駐仏使臣・孫寶琦に随行して渡仏し、モンタルジ農業実用学校に入学し、06年に卒業後、パスツール学院及びパリ大学にて生物学とくに大豆の研究に従事。ラマルクの生物進化哲学及びクロポトキンの互助論に傾注。09年、パリ市西郊に豆腐会社を設立し、素食を提唱。11年、帰国。12年、呉敬恒、蔡元培らと進徳会を發起、また唐紹儀、宋教仁らと社会改良会を發起。直ちに北京に赴き留法検学会を創設し、留法予備学校を設立。13年の二次革命失敗後、再び英仏に赴く。14年、フランスで蔡元培と留法西南維持会を組織。15年、勤工検学会を設立、また華法教育会を發起し、副会長に任ず。16年、『旅欧』創刊。17年12月、帰国、北京大学で生物学及び社会学の教授に任ず。19年、留法勤工検学会を組織。20年、北京で中法大学を創立し、理事長に任ず。20年、渡仏し、21年10月に中法大学をリヨンに創立。23年、中法大学理事長兼学長に任ず。37年、抗日戦以後、欧米、香港、重慶を往復し外交に従事。49年、スイスの赴く。56年、台湾に赴き定住。73年9月、台北で病死。享年92歳。(『民国人物大辞典』河北人民出版社、1991年5月)。
- 20 向金綺は、向警予を指す。1895~1928。女性革命家。本名、俊賢。湖南・湘浦出身。19年、蔡暢と周南女校で湖南女子留法勤工検学会を發起、成立させる。19年12月、フランスへ勤工検学に赴く。モンタルジ女子公学でフランス語を補習しながら、樹脂工場や紡織工場で働く。新民学会に加入し、『少年中国』等の新聞雑誌に投稿する。マルクス主義により女性問題を観察しはじめる。21年、蔡和森と結婚。同年、フランス政府より強制退去の命を受け帰国。22年、中国共産党に入党し、中国共産党第2回全国代表大会で、候補中央委員に当選、中共中央女性部部长に任じ、『前鋒』『嚮導』『婦女雜誌』『民国日報・觉悟』等の新聞雑誌に投稿し、女性運動の展開を促進した。25年、モスクワに赴き、東方大学で学ぶ。27年4月、帰国。前後して、武漢総工会、中国共産党漢口市委員会宣伝部と湖北省委員会で活動し、非公開の党内の雑誌『大江報』や通俗油印小報を主編する。28年3月、漢口フランス租界で逮捕され、5月1日、国民党政府により銃殺。享年33歳。
- 21 蔡若稀は、蔡暢を指す。1900~1990。女性運動指導者。中共初期の指導者・蔡和森の妹。本名、咸熙。湖南・湘郷出身。1916年、周南女子学校卒業と同時に、同校の体育教師となる。19年12月、フランスへ勤工検学に赴き、モンタルジ女子中学に入学。20年、新民学会に加入。22年、中国社会主义義青年団に加入。23年、中国共産党に転入。23年、パリで中共旅欧支部の教育幹事に任じ、フランス滞り期間、李富春と結婚。24年秋、李等は中共党組織の派遣でモスクワの東方大学に行き学習する。25年夏、帰国。広東で党活動を行う。26年7月、北伐軍政治部宣伝科幹事に任じ、11月、南昌に至り、中共江西区委婦女部部长に任じ。27年3月、武漢に移る。7月、汪精衛7・15政変後、国民党脱退を公開宣言し、地下活動に入る。12月、上海に赴く。全

- 国総工会女工部で活動し、同時に中央婦女委員会委員、江蘇省婦女委員会委員に任ず。28年6月、モスクワに召集された中共第6回全国代表大会に出席。30年、李富春が広東省代理書記に任じるに際し、李に随行し広州に至る。31年末、上海から瑞金へ移動。その後、長征に参加。（中略）49年3月、中華全国民主婦女聯合会会主席に任ず。90年9月、北京にて逝去、享年90歳。
- 22 蔡和森。1895～1931。1895年、上海で生れる。中共初期の理論家。元の姓は蔡林。名は潤寰。字は潤寰。号は和仙、後に和森に改める。長じての名は蔡林彬。湖南・湘郷出身。19年12月、フランスへ勤工儉学として留学。20年2月、モンタルジ男子公学に入学。21年10月、中仏リヨン大学闘争を発動したため、強制帰国される。21年11月、上海で中国共産党に入党。22年8月、個人の身分で中国国民党に入党。25年10月、中共代表団を引率しモスクワに赴く。コミンテルン執行委員会第6回拡大会議に参加。27年初、帰国。31年初、香港に赴き中共広東省委員会の活動を主宰。同年6月10日、香港で逮捕され、広州の陳濟棠に引き渡され殺害される。享年36歳。
- 23 曾暨は曾琦を指す。曾琦、1892～1951。四川・隆昌出身。09年春、成都高等学堂分設中学に転入し、王光祈らと詩社を組織。12年、重慶で『民国新報』『群報』を創刊。13年、共和大学に入学、14年、震旦学院に入学しフランス語を学び、北京に赴く。16年春、日本に赴く。18年、帰国し、留日学生救国団を組織し、中日軍事密約の廃止を要求。18年6月、王光祈らと少年中国学会の組織を發起し、上海に赴き、『救国日報』主筆に任ず。19年8月、フランスに留学し、モンタルジ中学に入学しフランス語を補習する。20年秋、パリに移り、フランス語学校に入学し、パリ社会学院で聴講する。パリ通信社を組織し、上海『新聞報』の招聘を受け、駐欧特派員となる。22年、ドイツに移る。23年、フランスに戻る。23年12月、李璿らとパリ近郊で中国青年党を組織。24年4月、青年党委員長に任ず。24年7月末、帰国し、左舜生らと週刊『醒獅』を創刊し、国家主義を鼓吹する。51年5月、ワシントンで病死。享年59歳。
- 24 言語不詳、意味不明。類推するに、禁欲主義の意か？
- 25 4ヵ月後は、実際には、6ヵ月余後である。王独清の渡仏は、「留法勤工儉学生」第15陣の20年5月9日に上海発、6月15日マルセイユ着である。王独清は、その一週間後にパリからモンタルジに移り、そこで留学生生活を始める。劉喬年（劉清揚）と陳洪巖（張申府）は、「留法勤工儉学生」第19陣の20年11月24日上海発、12月27日マルセイユ着である。なお、王独清と劉清揚の渡仏は、留法勤工儉学によるものだが、張申府は勤工儉学ではなく、周永珍『留法紀事』（2008年7月、国家図書館出版社）によれば、「北京大学の講師」だった張は、「フランスのパリ大学中国学院が教師として招聘したため」という。劉と張は、渡仏後、しばらくの間、パリで暮らす。劉と張と同船した留学生がモンタルジに来た時期は、おそらく20年の年末か、21年1月初である。とすると、王独清が、同行の留学生から、劉と張のハブニングを耳にするのは、約6ヵ月余り後である、と推量できる。
- 26 陳洪巖は張申府を指す。1893～1986.6。中共初期の共産党員。河北・献県出身。五四時期、20年に北京大学助教となり、陳独秀、李大釗らと『每周評論』を創刊。『新青年』編集員に任じ、積極的に新文化運動とマルクス主義の宣伝活動に従事。20年、北京共産主義グループ創立準備に参加。中国共産党の最初の党員の1人になる。20年12月、フランスに赴き共産主義グループを指導。中共駐独、駐仏支部の主要な責任者の1人となる。帰国後、25年1月に国民党との合作問題で、張太雷との意見の対立から、中国共産党を離党。黄埔軍官学校政治部副主任（主任は戴季陶）に任ず。大革命失敗後、広州大学、暨南大学、中国大学、清華大学、北京大学の教授に就任し、哲学、文献翻訳に従事。満州事変後、華北各界救国連合会に参加。抗日戦争時期は、武漢、重慶等で抗日民主活動に従事。46年、民盟を代表し旧政治協商会議に参加。建国後、北京図書館研究員、全国政治協商会議委員、中国農工民主党中央顧問に任ず。57年、右派分子のレッテルを貼られるが、文革後、名誉回復。86年6月、北京にて病死。